現代中国語における時間軸に沿って継起的に起こる出来事と連続構造

橋　本　陽　介

0．はじめに

橋本（2019）で明らかにした通り、中国語の書き言葉では「一つの文」、すなわち「句点から句点まで」の区切り方が英語や日本などの言語とは相当に異なっている。その特徴は、①欧米言語や日本語では「一文」にできないものが読点でつながっていってしまう　②読点でも句点でもよい場合が多い　③複文の論理的関係がよくわからない　④従属節が比較的独立している。とまとめることができる。こうした特徴について吕叔湘(1979：27)は「流水文」と呼んだ。ただし、呂の言う「流水文」は多分に印象的なものであり、厳密な定義がされているわけではない。その後の流水文の主な先行研究としては、胡明扬・劲松(1989)、吴竟存・梁伯枢（1992)、沈家煊（2012)、王洪君・李榕（2014)、王文斌・赵朝永（2017）などが挙げられる。橋本（2019）ではこれらを検討したうえで、これらの形式的分析では明らかにならないことが多いとし、中国語書き言葉における「一つの文」を分析するためには、Givón (1997)の言う連続構造の概念を導入する必要があるとした。Givón (1997)は、文法的複雑さを得る手段として、「埋め込み」と「連続」の二種類があるとする。中国語は従属節を取りにくい言語であり、「埋め込み」の手段が取られにくく、逆にいくつもの動詞句が連なる構造や、修飾語が埋め込まれずに比較的独立した資格で節をなす中国語は典型的な「連続」の言語である。中国語の書き言葉が①から④のような特徴を示す根本的な要因は、埋め込まれもせず、従属もしない比較的独立した節が次々に付加される形で「一つの文」が作られているからだと考えられる。比較的独立しているため、句点で区切ることもできるし、「一つ

のまとまり」と考えて読点でつなげることもできるのである。

とはいえ、「流水文」と言われたような文であっても、ランダムに「一つの文」を作っているわけではなく、一定の規則がある。その規則が明らかになれば、中国語の書き言葉において「一つの文」がどのような単位であるかが明らかになってくるだろう。また、中国語ではこの連続構造を利用して修辞構造も作り上げていると考えられる。修辞構造については、別稿で明らかにしていく予定である。

本稿は中国語書き言葉、中でも小説文の「一つの文」の形式的特徴を明らかにする研究の一つである。その中でも、時間軸に沿って継起的に起こる出来事が「一つの文」でどのようにあらわされるかを見る。なぜ小説文を対象とするかなど、方法論の問題はやはり橋本（2019）を参照いただきたい。

１．同一主語の連続する動作

橋本（2014）が明らかにしている通り、小説文では中国語に限らず物語現在で継起的に起こる出来事を一コマずつ詳細に叙述していくことが多い。このため、英語や日本語などでも、時間軸に沿って継起的に起こる動作行為や状態の変化（つまり出来事）を生起する順序に並べる語り方は珍しくない。継起的に起こる出来事は、典型的には動詞句で表されるが、単純に動詞句を連続させるのではない方法が取られることもある。Givón（1995：35）は以下のような例を挙げている。

⑴　Coming out, stopping to check the mailbox, taking a look at the driveway and pausing to adjust his hat, he turned and walked to his car.

⑴では、最後のhe turned and walked to his carのみが、主語と定動詞を用いており、それ以外の節は分詞の形を取って主節に従属している。このように、言語ではメインとなる節以外は文法的な標識が削減される傾向にあるとされる。順序としては時間的に先に起こったことが前、後に起こったことが後にくるのが基本である。一方、中国語は比較的動詞句を連続させていきやすい言

語であり、明確に従属節化されにくい。Givón（1989）はこうした傾向を持つ言語をserial-verb language とする。例を見る。

⑵　我走到黑板前的桌子后面，放下教具，慢慢抬起头，看学生们。(p.85)

黒板の前の教卓のところへ行って、教科書と白墨を置き、ゆっくりと顔を上げてみなを見た。(p.167) ≪孩子王≫

⑶　我自己抽出一支，点上，慢慢将烟吐出来，看着他。(p.92)

ぼくは一本抜き出して火をつけ、彼を見やりながらフーッと煙を吐き出した。(p.182) ≪孩子王≫

⑷　余司令从前边回来，蹲下，捏着王文义的脖子，压低嗓门说：(p. 8)

余司令が前方からもどってきて、かがみこみ、王文義の頸をつかんで声をころした。(p.16) ≪红高粱≫

本稿では例文に実際に出版されている日本語訳を参考として付す。訳文はあくまで参考ではあるが、その処理の仕方からも、翻訳の問題を考えることが可能になると思われる。

戴浩一（1988）は中国語においては、ふたつの文の相対的順序は時間の流れに従うとし、これを「時間順序原則」と呼び、重要な法則であるとした。同一主語の場合でも、そうでなくても、一連の動作および状態変化を表す場合、時間軸に沿って生起する順番に動詞句等が並べられる。また、⑵～⑷のように、同一主語の一連の動作を表す場合、最初に主語が出されると、それ以降の動詞には現れにくくなる。一つの動詞、または動詞句が一つの標点節を担うことが多い（なお、本稿では便宜上、読点から読点までの単位を「標点節」と呼ぶことにする）。連続する動詞句には、⑶の“点上”や⑷の“蹲下”のように動詞に補語がついただけのもの、⑵の“慢慢抬起头”、⑷の“压低嗓门说”のように、連用修飾語がつくもの、⑷“余司令从前边回来”のように介詞句がつくもの、⑵の“看学生们”のように動目構造になっているものなど、様々ある。

このように中国語では、連続する動作や状態変化が動詞句の連続として細かく表出されることが頻繁にある。一方、実際に翻訳されている例を観察すると、それをそのまま動詞句の連続として処理することよりも、何らかの処理が施さ

れることが多い。例えば⑵の原文は四つの動詞句がそれぞれ時間軸にそって同じ資格で並列的に並べられているが、日本語訳は後半二つの動作を「ゆっくりと顔を上げてみなを見た。」と一つにまとめ上げている。このため、「ゆっくりと顔を上げて」は修飾成分になっている。⑶では前半二つの動作を「ぼくは一本抜き出して火をつけ」と一つにまとめ上げている。⑷後半は原文では“慢慢将烟吐出来，看着他”と、二つの動作を並べているところを、「彼を見やりながらフーッと煙を吐き出した。」と付帯状況にしている中国語は時間軸に従って並べるとするなら、ゆっくりと煙を吐き出してから彼を見るという時間順序であるはずなので、原文とはやや順序が変わってしまっている。

⑵から⑷のように、同じ主語の連続する動作を表す場合、日本語でも動詞句の連鎖として直訳できなくはない。だが、訳者は動詞句を単純に並べた形には翻訳しない傾向にある。これは、そのほうが自然だという判断をしているからである。とすれば日本語で書く意識としては、動詞句を単純に続けるのは自然ではない、と考えていることになる。逆に言えば、中国語は動詞句を単純に並列させても、不自然にはならない。この場合の自然、不自然は統語的というよりも、修辞的なものである。日本語では動詞句の単純な連鎖が冗長に感じられたり、「こなれた日本語」とみなされないのに対して、中国語ではそう感じられないということである。

また、以下のように日本語では連体修飾構造に翻訳されることもある。

⑸　有一天她从山上下来，和我讨论她不是破鞋的问题。(p.３)

　ある日山から下りてきたあいつは自分はふしだらではないと議論をふっかけてきた。(p.３)≪黄金时代≫

原文は「山から下りてきて、私と討論した」と二つの動作が順番に並んでいる。このように、中国語では継起的に起こる出来事は基本的に動詞句を連続させることで表す。しかし日本語では必ずしもそうではない。日本語訳は「山から下りてきたあいつは」と、最初の動詞句を修飾語に変換して翻訳している。このような訳が見受けられるのは、日本語が連体修飾構造を相対的に好む言語だからである（寺村1993：164-165など)。堀江・パルデシ（2009）は、日本語

と中国語を比較すると、日本語のほうが中国語よりも連体修飾を用いる割合が非常に多いことを論じる。小野（2013：239）は、「単純に継起性のみを有する二つの行為を表す文」の第一動詞句では、中国語において連体修飾句の使用が見られないとする。⑸などはその例で、中国語では動詞句の連続で表すが、日本語では連体修飾にしてもいい。

２．主語が切り替わる

中国語が動詞、あるいは動詞句を連続させる叙述を好むことはこれまでも指摘されてきた。ここまで見たような同一主語の場合に、一連の行動が「一つの文」になることは、それほど大きな問題ではないように思われる。より複雑かつ奇妙に思われるのは、途中で主語が切り替わる例である。主語が切り替わる場合にも、時間軸に沿って、出来事が生起する順に叙述されていく点は同じだが、場合によっては一連の動作が非常に長く読点でつながる。日本語の感覚では、なぜ読点でつながってしまうか不思議になる。

⑹　任副官在他腚上打了一鞭子，他嘴咧开叫一声：(p.３)

　任副官がかれの尻に鞭をくらわすと、王文義は口をゆがめて一声叫んだのだった。(p.６）≪红高粱≫

⑺　父亲应声弹起，与罗汉大爷抢过去，每人抓住一面早就铺在地上的密眼罗网的两角，把一块螃蟹抬起来，露出了螃蟹下的河滩涂地。(p.６）

　父ははね起きて、羅漢大爺にまけじとかけより、それぞれ地面に広げておいた細い目の網の両端をつかんだ。蟹どもを持ち上げると、その下に隠れていた干潟の地面が姿をみせた。(p.11）≪红高粱≫

⑹は任副官の動作と、それに続く王文義の動作が連続して叙述されている。日本語でも、このように主語が一度切り替わるだけならば、問題なく「一つの文」にすることができる。だが中国語ではさらに長くつなげていくことが可能である。⑺では、第一、第二標点節は“父亲”を主語とするが、次の第三、第四標点節は“每人”を主語とする。第五標点節は二人の行った動作の帰結である。つまり、「父がはねおきる→羅漢大爺にかけよる→網の両端をつかむ→蟹

を持ち上げる→地面が露出する」という一連の流れが「一つの文」にまとめられている。

主語は変化しているが、時間軸に沿って継起的に行われる動作行為が一つずつ叙述されている。さらに最後には、その行為の帰結としての状態変化が叙述され、そこまでが「一つの文」になっている。

このように、中国語では主語が変わっても時間軸に沿って継起的に行われる動作、発生する出来事が「一つの文」としてまとめられうるのである。次のように、「一つの文」で主語が何度も切り替わることも珍しくない。

⑻　老陈似无所见似无所闻，只在前面走，两个学生追打到他跟前，他出乎意料地灵巧，一闪身就过了，跑在前面的那个学生反倒一跤跌翻在地，后面的学生骑上去，两个人扭在一起，叫叫嚷嚷，裤子脱下一截。教室草房后面，有一长排草房，房前立了五棵木桩，上面长长地连了一条铁线，挂着被褥，各色破布和一些很鲜艳的衣衫。(p.82)

陳さんは何も聞こえなかったかのように、前を歩き、二人の生徒がそのそばまで追いかけてきたが、彼は驚くべき器用さをみせ、さっとかわした。前を走っていた生徒はひっくりかえり、後ろの学生がそれに乗っかり、二人がとっくみあって、大騒ぎをし、ズボンもずり落ちていた。[1]≪孩子王≫

⑻では、陳さんと子供たちの一連の動きが描かれており、主語が目まぐるしく交替している。“老陈似无所见似无所闻”が付帯的な形容表現、“他出乎意料地灵巧”が次の動詞句を修飾する形になっている以外は、すべて物語現在における人物の一連の行動である。主語は入れ替わってはいるものの、時間軸に沿って一コマずつ展開していることは⑵～⑸など、主語が同じ場合と変わっていない。やはり時間的に連続して発生する出来事であるならば、中国語は読点でつなげることが可能であることがわかる。この場合、空間は固定されており、その空間のなかで複数の主体が行う動作の連続を、動詞句の連続という形式で表しており、それを「一つの文」にしているのである。その先の“教室草房后面”からは空間の描写になっており、時間軸に沿った出来事の描写がこの直前で終

わっていることも確認できる。

では、なぜこのように長く「一つの文」を続けることが可能なのだろうか。逆に言って、日本語ではなぜ「一つの文」に訳しにくいのであろうか。日本語で頑張ってつなげようとすると、「陳さんが何も聞こえなかったかのように前を歩いていると、二人の生徒がそのそばを追いかけてきたが、驚くべき器用さを見せてさっとかわした。」までは可能である。このようにすれば、陳さんの行動として一つの文にすることができる。もう少し頑張るとするならば、「陳さんが何も聞こえなかったかのように前を歩いていると、二人の生徒がそのそばを追いかけてきたが、驚くべき器用さを見せてさっとかわしたため、前を走っていた生徒はひっくりかえった。」とできなくはない。こうすると、「かわしたため」まで全体が原因を表し、後半にかかることになる。つまり基本的に日本語では「Aすると、Bした」「Aだが、Bした」「Aなので、Bした」などの関係で結ばれる。AとBの内部構造はそれぞれ複雑にすることが可能ではあるが、現代日本語では大きくみて「前件＋後件」とするのが基本である。

一方、中国語が次々に続けられるというのは、単に接続の形式が表示されないというだけではない。単純に動詞句が並列されているのであり、「前件＋後件」のような構造を作る必要がない。換言すれば、次々に時間軸に沿って生起する出来事を動詞句として単純に並べているのであって、「Aすると、Bした」「Aだが、Bした」のような構造を形づくってはいない。このために読点でつなげられるのだと考えられる。読者としても、⑻は単純に起こったことが次々に叙述されているだけのように感じられる。

もう一例見る。

⑼　他的坟头上已经枯草瑟瑟，曾经有一个光屁股的男孩牵着一只雪白的山羊来到这里，山羊不紧不忙地啃着坟头上的草，男孩子站在墓碑上，怒气冲冲地撒上一泡尿，然后放声高唱：（p.１）

枯れ草が風に震えるころ、その墓に、尻を丸出しにした一人の男の子が一頭のまっ白な山羊を引いてやってきた。山羊はゆっくりと墓の上の草をはむ。男の子は墓碑の上に立ち、怒りにまかせて地べたに放尿してから、

声はりあげてうたった。(p.3)≪紅高粱≫

⑼では、最初の標点節で墓とその形容がされている。この第一標点節が場所として提示され、第二標点節で男の子が山羊を連れて来たことがあることが語られる。第三標点節では第二標点節で出てきた山羊が主語になっている。続く第四標点節から第六標点節までは男の子を主語とする動詞句の連続である。このようにされることで、「墓（場所の提示）→その墓にやってくる男の子と山羊（主体の提示）→山羊の動作→墓の上にたつ男の子→その男の子の動作」という流れが一つの出来事としてまとめ上げられていることになる。山羊の動作と男の子の動作は同時的なので、厳密に言えば先ほどまでの例とはやや異なっている。中国語としてはこのように、まず空間を提示し、そこに出現する二つのものを提示したら、その二つの行為を一つずつ描き、なおかつそれを一つの「文」としてまとめることは極めて自然である。また、「流水文」と名付けられたように、このような文は流れるように叙述が展開されているように感じられる。流れるような叙述に感じられるのは、各標点節が論理的関係性を結んだり、従属的な関係になったりするのではなく、並列的に連続しているからだと考えられる。この⑻や⑼のように、中国語では一定枠内でおこる連続で起こる動作や出来事を「一つの文」とすることができる。考えてみれば、中国語のようにある一定の枠内で起こる動作を一つのまとまりと考えるのは必ずしも不思議なことではない。英語や日本語ではそうしたまとめ方を取っていないだけのことである。

次に、日本語訳と対照させてみよう。日本語訳は第一標点節を「枯れ草が風に震えるころ」と時を表す従属節にして第二標点節につなげている。直訳風に「彼の墓ではすでに枯れ草が音をたて、かつて尻を丸出しにした男の子が…」とすると、つながらない。つながらないのは、両者の間に何らかの論理的関係性が見いだせないからである。また、第二標点節を訳し終えたところで一度文を切っている。「山羊を引いてやってきた」ことと、その山羊が「墓の上の草をはむこと」の間には従属的な関係がないし、並列的な関係もないためである。

英語訳ではどのような構造になっているだろうか。

⑽ A bare-assed little boy once led a white billy goat up to the weed-covered grave, and as it grazed in unhurried contentment, the boy pissed furiously on the grave and sang out:

この英語訳では、「尻を丸出しにした男の子」が一貫して動作の主体であり、その動作がいくつかandで連結されている。このように、英語でも一つの主体の連続する動作は比較的表出しやすい。一方、羊の動作は従属節に変形させられ、男の子の動作に従属する形になっている。原文と英語訳では、表されている内容はほぼ同じではあるが、修辞的構造が異なるため、読んだときの感触も異なる。中国語は「空間提示→そこに現れる羊と少年→羊とその動作→少年の動作」と、並列的に連続していくので、提示されている場所も、羊の動作も背景化されていない。叙述の順番に従って、並列的に一つずつそれを読んでいくことになる。背景化されていない情報を一つずつ処理していくから、流れるように感じられる。

「一つの文」とは、「ひとまとまりの思考（意味）」を表すものとされた。もし「一つの文」を句点から句点からまでだとするならば、句点から句点までで表される動作の連続を「ひとつのまとまり」としていることになる。この場合、動作を含む時間的展開のある出来事を表しているので、「ひとまとまりの出来事」としていいだろう。中国語では、時間軸に沿って継起的に起こる出来事を、動詞句を次々に付加するという形で「一つの文」にすることができる。また、⑺のようにその動作行為の結果として起こる状態の変化までも含めて「一つの文」になる。

3．どこで区切るか

さて、ここまで中国語では時間軸に沿って継起的に発生する出来事は、読点でつなげ、「一つの文」にできることを述べてきた。これは、中国語が並列的に動詞句を連続させていくからであるとした。では、読点で切っても句点で切ってもどちらでもよいケースが多く存在している点はどのように考えられるだろうか。これまで見てきた例も、読点を句点に変えることもできる。

⑻’老陈似无所见似无所闻。只在前面走。两个学生追打到他跟前。他出乎意料地灵巧，一闪身就过了。跑在前面的那个学生反倒一跤跌翻在地。后面的学生骑上去，两个人扭在一起，叫叫嚷嚷，裤子脱下一截。

⑻は時間軸に沿って起こる出来事を順番に叙述している構造であり、比較的独立した節が並列的に並んでいるのであった。時間的に連続して起こっている出来事は、それ自体では分割されていない。分割しているのは書き手である。動詞句は単に並列されているだけだから、ある程度任意に「ひとつのまとまり」を設定することが可能になると考えられる。⑻では、老陳と子供たちの一連の行動がひとつにまとめられているとおり、時間的に連続した動作であるし、一つの出来事と認識して違和感がないが、その出来事を細かく分割しようと思えば、そうすることも可能である。中国語では、このように一つの出来事としてまとめ上げることもできれば、細かく分割して叙述することもできるのである。細かく切ると、次々に新しい出来事が起こっている感じがするため、緊迫感が出ることがある。⑻’では、前半を細かく切ったが、このようにしたほうが文体としては緊迫感が出やすい。

中国語では、連続で起こる出来事を表す場合、「一つの出来事」と認識しやすいため、「一つの文」にするのが基本になっている。その連続して起こる出来事があまりにも長い場合は、任意のところで区切りをつけるのだと考えられる。

４．動詞句の単純な連鎖ではない場合

ここまで、接続表現やアスペクト助詞等が使用されていない動詞句の連続を観察してきた。もちろん、接続表現を用いることによって節間の論理関係を明示する方法や、前件を後件に従属させる方法、アスペクト助詞を使う方法なども同時に存在しているので、それらにも簡単に触れておこう。

⑼　王文义伸手摸耳朵，摸到一手血，一阵尖叫后，他就瘫了：（p. 8 ）红高粱王文義は耳を触ってみて、手が血だらけになると、悲鳴をあげてへたりこんでしまった。(p.16)

⑽　丙崽在门前戳蚯蚓，搓鸡粪，玩腻了，就挂着鼻涕打望人影。《爸爸爸》(p.97)

丙崽は門の前でミミズをつついたり、ニワトリの糞をこねたり、その遊びに飽きると、鼻水を垂らして人影を望む。(p.253)

⑼では四つの動詞句が並んでいるが、後半の二つの動作が“后”や“就”によって関連付けられ、最後の動詞句“他就瘫了”に特に焦点が当たるような構造になっている。また、ここでは三人称代名詞“他”が表出されている点にも注意したい。この三人称代名詞は、最初の節に出てくる主語の王文義を指している。これまでみてきた同一主語のパターンでは、最初の動詞句以降は主語が表出されていなかった。同様に⑼も文法的には三人称代名詞はなくてもかまわない。しかしここでは、“他就瘫了”と主語も加えることによって、その前の三つの節からは比較的独立した単位として表出しているのだと考えられる。また最後の節に“就”が使われている。この語がつかわれることによって、最後の節に特に焦点が当たる構造になる。次の⑽でも四つの動詞句がつかわれているが、“就”の前にある三節と最後の一つは対等な関係ではなくなっている。

動作等、時間軸に沿って連続して生起する出来事が一コマずつ叙述される際に、アスペクト助詞の“了”が使用されることがある。木村（1997）は小説など、一連の行為を叙述するものを過程描写文とよび、過程描写文においては、その一連の行為の最後に“了”が使用される傾向にあるとした。

⑾　方波大踏步出门，周华欲追，刚起身，又坐下，听天由命似地闭上了眼睛。

方波は大きく足を踏み出して外に出て行った。周華は追いかけようと、身を起こしたが、すぐに座り込み、天命を受け入れるかのように目を閉じた。

（木村1997：p173、日本語訳は引用者）

木村（1997）は最後の“了”が「一連の動きの継起的な実現によって形成されるひとまとまりの行為の最終過程が完了の段階に至ったことを表している。」とする。「一つの文」にするとは、ある現実を「ひとつのまとまり」として提示することであるが、このような“了”の使用傾向から言っても、中国語において連続する動詞句による叙述が「ひとまとまり」と考えられていることが推

し量れる。なお、小説文で連続する動詞句のうち、最後ではない動詞句に“了”が使われる例については、橋本（2014）に詳しい。

これまでの研究では、このように接続を表す語やアスペクト助詞が使われるケースの分析のほうが多く行われていた。というのは、論理関係や従属関係を明示する場合や、アスペクト助詞等が使用されている場合は、そうしたことを表す要素が形態として表示される。言語学は、形が与えられたものを分析するのはしやすい。だが、中国語の小説ではそうした論理的関係や従属関係を明示しないことが非常に多い。明示しない、というより、そもそもそうした関係を結ばずに連続させていることが多い。形態的に表れるものではなく、形のないところにも注目すべきなのである。

５．時間順序原則に一見違反する例

ここまで見てきた通り、中国語小説では時間軸に沿って、生起するごとに叙述されていく。しかし、その原則に違反しているかに見える例がある。それはどのような場合だろうか。

⑿　之后，琴声响了，老瞎子又上好了一根新弦。(p.84)

やがて琴の音がひびいた。老盲人がまた新しい弦を一本張り替えたのである。(p.52) ≪命若琴弦≫

⑿は、第二節で、琴の音が響いたこと、第三節で老盲人が新しい弦を張り替えたことが叙述されている。時間順序原則に従うなら、弦を張り替えてから琴の音が響くはずなので、逆転しているように思われる。この順序になるのは、視点人物の認知的な順序に従っているからだと考えられる。⑿の視点人物は老盲人からは離れたところにいて、まず琴の音が響くのを耳にする。その音を聞いてから、老盲人が弦を新しく張り替えたことを判断している。つまり、現実の時間軸には沿ってはいないが、視点人物の認知する時間軸には沿っていると言える。現実の時間軸とは異なる順序なので、日本語訳の方も「張り替えたのである」と「ノダ」を使用した文に変更している。

先に述べたことに対して、判断を後から付け加える場合にはしばしば“是”

が用いられるので、以下のようにしたものと似ている。

⑿’之后，琴声响了，是老瞎子又上好了一根新弦。

このように“是”を用いた節は、後から前の節を説明する。物語文では発生した出来事の叙述が先に来て、後からそれを説明することがよくある。

⒀　父亲迷失了方位。他在前年有一次迷途高粱地的经验，但最后还是走出来了，是河声给他指引了方向。(p. 7)

方位感は消えてしまった。前の年にも父は高粱畑で迷ったことがあったが、最後には外へ出ることができた。河の音が方角を教えてくれたのだ。(p.13) ≪红高粱≫

⒁　河北岸有一头骡子嘶哑地叫起来。罗汉大爷听出来了，是我家的黑骡子在叫。(p.17)

河の北岸で、一頭の騾馬がいなないた。うちの黒騾馬だ。羅漢大爺はその声を聞きわけた。(p.32) ≪红高粱≫

⒀では、最初の文で父が方角を見失ったことが語られる。これが、この語られている物語現在で発生している出来事である。二文目は全体としてフラッシュバックで、前年にも高粱畑で迷子になったことが語られる。その第一標点節で「迷った経験があること」を語り、第二標点節で「最後には出てくることができたこと」が述べられると、その出てこられた理由として第三標点節に“是”を用いて説明が付されている。⒁では、騾馬の鳴き声が聞こえてきたのを、羅漢大爺が聞いたことが表される。これが物語現在において登場人物が認知した出来事であり、そしてその認知した出来事の説明として「自分の家の黒騾馬が鳴いているのだ」という判断を続けている。

⒀～⒁の日本語と比べても分かる通り、日本語では何らかの出来事の叙述、もしくは状態の描写に対して、判断や評価、説明を下す場合には、文を分けるのが普通であるが、中国語の場合には、ある出来事の叙述と、それに対する判断・説明は一つにまとめられることが多い。

さて、本章ではここまで、連続で生起する出来事の叙述を見てきた。中国語は動詞句を連続させ、細かく描くことを好む習慣がある。このため、日本語に

そのまま翻訳すると、冗長に感じられることも少なくない。書き手の立場になると、中国語で叙述する場合、無意識的にもこの傾向に支配されやすい。支配されているからこそ、その実現した文が、動作を細かく時間軸に沿って表した形として出てくる。また、中国語は相対的に従属節を取りにくい言語だと言われている。次々に並べられる動詞句は、特別な手段を取らない限り、並列的に並べられている。

動詞句の連続が多いこと、従属節を取りにくいことはこれまでも指摘されてきた。だが、そのことと中国語の「文」の観念をつなげる考え方、修辞的な構造につなげる研究はまだなかった。連続で起こる一連の動作は、中国語では読点でつなげられ、「一つの文」とされることが多い。「一つの文」とは「ひとまとまり」を表したものであり、それが出来事を表しているとすると、「ひとまとまりの出来事」として表出されていることになる。連続する動詞句は並列的に付加される形で連続し、従属的な関係を結ばないために、日本語や英語の発想から考えると非常に長く「一つの文」が続くことが多い。時間は切れ目なく続くものだが、そのどこからどこまでを「ひとまとまり」とするかは、表現者次第で変えられるため、読点にするか句点にするか、どちらでもよいケースが出てくる。

６．日本語の中国語訳から動詞句連続構造

中国語は時間軸に沿って継起的に発生する出来事を叙述する際、動詞句の連続構造を使用する。この際、一連の出来事は「一つの文」にしてしまうことが多い。最後に、日本語を中国語に翻訳した際に、「一つの文」の区切り方が変わる例を見てみよう。

⑮　石神は目の前の信号が赤になるのを見て、右に曲がった。新大橋に向かって歩いた。(p.６)

　　见信号灯变成红色，石神遂向右转，朝新大桥方向走去。(p.１)『容疑者Xの献身』

⑯　ぼくはウィリアムズの肩を叩く。向こうも会話を打ち切ってポッドに乗

り込んだ。(p.27)

我拍拍威廉姆斯的肩膀，他终止谈话，爬进鞘里去了。(p.13)『虐殺器官』

以上の二例は、物語現在において連続して起こる動作を表したものである。⑮では、「信号を見て、右に曲がり、新大橋に向かって歩く」という一連の動作が表されているが、日本語原文は「右に曲がった」で一度切っている。⑯は主語が変わる例である。中国語の意識としては、これらの動作は時間軸に沿って継起的に行われる動作であり、これだけ短い間に文を区切るのはむしろ不自然と考えるのであろう。原文はそれぞれ二文であるのに対して、一文に翻訳している。もちろん、⑮は次のように日本語でも一つの文にまとめ上げることも可能である。

⑮’石神は目の前の信号が赤になるのを見て、右に曲がり、新大橋に向かって歩いた。

⑮と⑮’はほぼ同じではあるが、⑮のほうが一度切っているため、カットが一度切れている感じがする。

⑯のように、主語が切り替わる場合、日本語で「一つの文」にするためには、次のようにするほうが自然である。

⑯’ぼくがウィリアムズの肩を叩くと、向こうも会話を打ち切ってポッドに乗り込んだ。

⑯’では前件が従属節化している。⑯では「ぼくがウィリアムズの肩を叩く」行為と「ウィリアムズが会話を打ち切ってポッドに乗り込むこと」は二つの出来事であり、両者とも対等な関係であるが、⑯’では前件が従属節化することによって後件のほうに焦点が当たる構造になる。中国語訳は、読点でつなぎ、一連の出来事として表しているが、⑯’のように従属節化しているわけではない。中国語では途中で主語が変わっても、時間的に連続している事態は、一つの出来事として表すのであった。

⑮、⑯では、二文で表されている動詞句間の時間的距離は、ごくわずかである。次に、時間的距離がやや開く例を見る。

⑰　家にいるときは、朝早く起きてだいたい夕方近くまで小説を書いた。

（p.57）

待在家里时，他一大早便起床，基本直到傍晚都在写小说。（p.26）『1Q84』

⒅　するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。

于是，乐的狐狸来栖，盗贼入住，最后竟将无人认领的死尸也搬了进来，且日久成俗。『羅生門』

⒄では、「家にいるときは」が背景的な時間の設定を行っている節である。「朝早く起きて」は「小説を書く」を修飾する形に埋め込まれているが、中国語訳は動詞句の連続に翻訳している。⒅は、「狐狸が棲む」「盗人が棲む」「引き取り手のない死体を棄てていく」という三つの動作行為が表されており、文は三つに分けられている。しかし中国語訳では第二標点節から第四標点節までの動詞句連続で表している。また、最後の「引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行く」は「習慣」にかかる連体修飾語であるが、中国語では通常の動詞句にし、その後にその説明をつける形にしている。ここまで見てきたのと逆の操作を行っているのがわかる。

7．まとめ

ここまで見てきた通り、中国語では、句点から句点までの単位、すなわち「一つの文」の作り方が日本語などとは大きく違う。その要因は中国語が比較的独立した節を並べていく連続構造を取るからであり、各節の従属度が低いことにある。だが、その中国語でも「一つの文」はランダムに作られるわけではない。本書では現代語の書き言葉、中でも小説文を対象とし、時間軸に沿って継起的に起こる出来事の表し方について見てきた。このようなケースでは中国語は動詞句を単純に連続させていく形式を日本語などに比べて好む。また連続して起こる動作、状態変化は「一つの文」にまとめられることが多い。この際、主語が同じでも、何度も切り替わっても問題ない。中国語における節の連鎖は、これまで主に行われてきたような論理的意味関係からの分析では限界があり、独

自の分析を考える必要があるが、よく観察してみれば中国語としては合理的なしかたでまとまりを作っていることがわかる。

本稿では、中国語が取る連続構造、および「一つの文」について、ごく一部分しか取り上げられていない。徐々にその全体像を明らかにしていきたい。また、中国語はこの連続構造を前提として修辞構造も作り上げているように思われる。そうした点も、別稿で明らかにしていく予定である。

（引用文献）

（日本語文献）

小野秀樹．2013.「中国語における連体修飾句の意味機能」『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』白帝社

寺村秀夫．1993.『寺村秀夫論文集Ⅱ』くろしお出版。

橋本陽介2014.『物語における時間と話法の比較詩学』水声社。

橋本陽介2019.「中国語書き言葉における「文」論序説」、『人文研究』（印刷中）。

堀江薫・プラシャント・パルデシ．2009.『言語のタイポロジー』研究社。

（中国語文献）

陈平1991.《现代语言学研究：理论・方法与事实》、重庆出版社。

戴浩一1988.〈时间顺序和汉语的语序〉、《国外语言学》第１期：10-20頁、黄河訳。

胡明扬・劲松1989.〈流水句初探〉、《语言教学与研究》第４期：42-54頁。

胡壮麟1994.《语篇的衔接与连贯》。上海：上海外语教育出版社。

吕叔湘1979.《汉语语法分析问题》。北京：商务印书館。

沈家煊2012.〈“零句”和“流水句”— 为赵元任先生诞辰120周年而作〉、《中国语文》第５期：403-415頁。

王洪君・李榕2014.〈论汉语语篇的基本单位和流水句的成因〉、《语言学论丛》第49辑：11-40頁。

王文斌・赵朝永2017.〈汉语流水句的分类研究〉、《当代修辞学》第１期：35-43頁。

王缃1985.《复句・句群・篇章》。西安：陕西人民出版社。

吴竟存・梁伯枢1992.『现代汉语句法结构与分析』。北京：语文出版社。

邢福义2001.『汉语复句研究』北京：商务印书馆。

赵恩芳・唐雪凝1998.『现代汉语复句研究』济南：山东教育出版社。

（英語文献）

Givón, T.1989. *Mind, Code and Context* : essays in pragmatics, Lawrence Erlbaum Associates

Givón, T.1995. *Functionalism and grammar*, John Benjamins Publishing Company.

Givón, T.ed.1997. *Grammatical Relations : a functionalist perspective*. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins Publishing company.

〈引用例の出典〉

（原文が中国語）

阿城「孩子王」『棋王』作家出版社、2000年（立間祥介訳「中学教師」『チャンピオン』徳間書店、1989年）。

莫言『红高粱家族』南海出版公司、1999年（井口晃訳『赤い高粱』岩波現代文庫、2003年）。

史铁生「命若琴弦」『第一人称』山东文艺出版社、2001年（三木直大訳「命は琴の弦のように」『史鉄生　わが遥かなる清平湾他』現代中国文学選集３）。

余华『许三观卖血记』南海出版社、1998年（飯塚容訳『血を売る男』河出書房新社、2013年）。

王小波『黄金时代』花城出版社、1997年（桜庭ゆみ子訳『黄金時代』勉誠出版、2012年）

（原文が中国語以外）

伊藤計画『虐殺器官』ハヤカワ文庫JA、2010年（邹东来・朱春雨译『无形的武器』人民文学出版社、2007年）。

東野圭吾『容疑者Xの献身』文春文庫、2008年（刘子倩译『嫌疑人X的献身』第２版、南海出版社、2014年）。

村上春樹『1Q84』book１前編、新潮文庫、2012年（施小译『1Q84』南海出版社、2010年）。

芥川龍之介「羅生門」『芥川龍之介全集第一巻』岩波書店、1995年（林少华译『罗生门』青岛出版社、2016）

注

１）日本語訳版ではこの文の訳出がないため、引用者訳を用いた。